



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	モンゴル牧畜社会の資源管理に関する環境心理学的考察12 : コモンズをめぐる境界と社会的アイデンティティ
Author(s)	坂本, 剛; 滝口, 良; 大沼, 進
Citation	環境心理学研究, 3(1), 1-10
Issue Date	2015-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61468
Type	journal article
File Information	JJEP201503_001.pdf



モンゴル牧畜社会の資源管理に関する環境心理学的考察¹²

— コモンズをめぐる境界と社会的アイデンティティ —

坂本 剛³ 名古屋産業大学 滝口 良 大沼 進 北海道大学

Ostrom(1990)に代表されるコモンズ論の知見は途上国に対する開発援助の一環として、地域の人々による自然資源管理(CBNRM)として制度的応用が行われている。CBNRM は所有権レジームの有効性を強調するものであり、資源そのものの境界と利用権を持つ者の境界を明確に定義することを要求する。本研究は、モンゴルの牧畜社会における CBNRM の導入に至る土地利用制度の変遷を整理し、その上で CBNRM の応用課題について検討を行い、牧畜社会の基盤となる互酬性の規範と明確な境界の主張が葛藤を発生させている可能性を示唆した。以上の議論に対して社会的アイデンティティ理論から考察を行い、コモンズ論による明確な境界の主張は、些細な境界が集団成員の認知や行動に影響を及ぼすという影響過程を過小評価しており、モンゴルの牧畜社会のような一般交換に基づく広範な協力的行動が支える社会システムにとって脅威となりうることを明らかにした。最後に、制度設計の上でより有効と考えられる指針を示した。

キーワード: コモンズ, モンゴル, 社会的アイデンティティ理論, 地域の人々による自然資源管理(CBNRM), 互酬性規範

An Environmental Psychological Study about Resource Management System of Pastoral Society in Mongolia:

Boundaries over Commons and Social Identity

Go Sakamoto Nagoya Sangyo University, Ryo Takiguchi, and Susumu Ohnuma Hokkaido University

Findings in commons literature, represented by Ostrom (1990), have been applied practically to development policy determination in the name of community-based natural resource management (CBNRM). To put a great emphasis on the effectiveness of property rights regime, CBNRM requires definitions of clear boundaries of natural resources themselves and of who are the appropriators for them. However, applying of CBNRM to Mongolia raises social and psychological problems, which were discussed in this paper. First, with reference to the history of laws and principles of land management in Mongolia, we suggested that a serious conflict occurs in the pastoralist's societies between the norms of reciprocity that underlie in their societies and the notion of clear boundaries required by CBNRM. Second, based on the social identity theory, we claimed that commons studies with the notion of boundaries underestimate the social influence processes which may affect social cognition and behavior of the group members, even if a given boundary seems trivial. Delineated boundaries may have threatened the social system which is based on the extensive cooperative behavior through generalized exchange, as seen in the pastoral societies in Mongolia. Finally, we proposed more effective guidelines for designing rules and institutions.

Keywords: commons, Mongolia, social identity theory, community-based natural resource management (CBNRM), norms of reciprocity

¹ 本研究は、大学共同利用機関法人人間文化研究機構・総合地球環境学研究所 Feasibility study「自助自律的コミュニティの創成に向けた環境リテラシーの表象と向上（代表：石川守）」の助成を受けた。

² 本稿に収録した調査の実施にあたり、北海道大学環境科学院の石川守先生と小野智郁氏には多大な協力をいただきました。記して感謝申し上げます。また、トゥブ・アイマグのアルタンブラグ・ソム及びウランバートルでの調査にご協力いただきました牧畜民の皆様、行政関係者の皆様に厚く感謝申し上げます。

³ 愛知県尾張旭市新居町山の田 3255-5 名古屋産業大学環境情報ビジネス学部
e-mail: sakamoto@nagoya-su.ac.jp

本研究の目的

本研究は、モンゴルの牧畜社会における資源管理制度を通して、途上国開発支援に際するコモンズ論の適用の意義と問題点について検討を行う。コモンズ論の強い影響を受ける支援政策が導入されているモンゴルの牧畜社会では、その弊害も懸念されている。モンゴルの牧畜は伝統的には遊牧に基づいており、明確な境界を設けない慣習的な資源の共有管理の仕組みが存在していたが、土地の私有化を奨励する定住化政策の導入と、牧草地に境界線を引いて区画化し、利用権を付与された利用者を明確化するものへの変化とによる、移行期的な問題が生じている。

本稿でははじめに、Hardin(1968)の共有地の悲劇(the tragedy of the commons)の議論からOstrom(1990)らを経たコモンズ論の流れを概観し、実際に途上国支援に用いられるコモンズ論の中での議論を整理する。次に、モンゴルにおける土地の私有化に関する議論の開始から「地域の人々による自然資源管理」(community-based natural resource management, 以下CBNRM)へ至る土地管理の変遷を整理し、近年の牧畜社会に適用されたコモンズ論に基づく CBNRM が抱える限界について検討する。そして、CBNRM アプローチのもとで発生する事例の記述から、社会心理学分野で中心的に発展してきた社会的アイデンティティ理論を用いて問題を精緻化し、最後に、途上国支援の制度設計において、より有益と考えられる指針を示す。

1. コモンズ論と CBNRM

(1) コモンズ論の展開

途上国支援での資源管理政策における有力なテーゼとなったのは、Hardin(1968)による共有地の悲劇の議論であった。Hardin は、共有地の悲劇に対し、相互に合意された共通の束縛を解決策として挙げ、資源を管理する制度に関する合意は政府によってのみなされるべきであり、例えば個人に内在化された規範などは十分に機能しないと示した。議論の中で Hardin は、共有地を私有化するか、あるいは政府の定めた合意による管理を行うかという 2 つの具体的な解決策を挙げ、その有用性を指摘している。このいわゆる Hardin 説と

その現実場面への応用は、様々な分野で議論の対象となり、多くの批判的検討が行われることとなった。この検討の流れに大きく貢献したのが、1983 年に全米研究評議会が立ち上げた共有資源管理に関するパネルであり、ここからコモンズ論の統合的議論が開始された(Dietz, Dolšák, Ostrom & Stern, 2002)。

現実の共有資源(common pool resources, CPR)を対象にフィールド研究を展開してきたコモンズ論の研究者たちによる Hardin 説に対する根本的な指摘は、Hardin 説が、利用を制限する仕組みが全く存在しないオープンアクセスの状態と、資源の利用者たちが長期にわたって利用・管理する権利を発達させてきた共有という一種の所有権が存在する状態を混同しているという点であった。Hardin の見解と後のコモンズ論の研究者たちの見解は、資源管理の問題を社会的ジレンマ状況の一種として見なし、ジレンマ状況の解決策として所有権レジームの効果を重視するという点では一致している。所有権がない、あるいは機能していないオープンアクセスの状態と異なり、資源に対して明確な所有権が存在する状態では、所有権を持つアクターはその資源の管理において持続可能な方法を採用し、結果的に資源の適正な管理が行われるであろうとする考えである。ただしコモンズ論の研究者たちは、所有権レジームの中でもとくに共有のレジームによって資源が適性に管理できていることを事例を通して実証し、その共有のための方法について精査を行っていた。

コモンズ論の研究成果は、Ostrom(1990)やBaland & Platteau(1996)によって共有資源の適性管理における制度の設計原理(design principles)として整理されている。同時にコモンズ論全体は世界銀行などの巨大組織による資金援助のもとで進む途上国の資源管理政策と連動し、その実施過程から浮上してくる新たな課題を糧にして研究を進展させてきた(三俣, 2008)。制度の設計原理はこうした途上国支援の資源管理政策の中で、CBNRM として活用され、制度の設計と運用、評価に用いられている。以下に Ostrom による設計原理を大沼(2014)が整理したものを列挙する。ここでは共有資源管理が持続的に成功するための 7 つの条件と、8 つ目に問題提起が整理されている。

1. 資源を利用する権利のある人びとが明確に定義できること
2. 適切な葛藤解決(conflict resolution)の仕組みが備わっていること
3. 共有資源を維持するために、個人は便益に応じた義務が適正にあること
4. 監視(monitor: 監視と表現してもよいが、見張るだけでなく目の届くようにすること全般を指す)を利用者でお互いにするか、利用者がもっともだと承認できる人が行う
5. 制裁は、ルール破りの程度や繰り返される頻度によって、ゆるやかなものから段階的になされるべきである
6. ルール作りや変更の意思決定プロセスに多くの利用者が参加できること
7. 外部の統治者は、自主的な統治の利用者の権利をはっきりと認めること

そして8つ目に、共有資源の適正管理をめぐる監視や葛藤解決の自主的な統治の考え方は、様々な大規模事業においてはこれらが複雑な入れ子構造になっており、より大規模な集団での相互協力の達成にも有効な考え方であろうと言及されている。

(2) CBNRM とその課題

Ostrom & Schlanger(1996)は、国有管理と私有化に対する CBNRM の利点を次のようにまとめている。CBNRM では所有や利用の権利と管理制度が利用者自身によって実施、監視、改善されるため、資源に関する情報や管理の効果性に関する情報が利用者の間に蓄積されていく。その蓄積された情報に基づいて、管理制度は、資源を含む地域の物理的環境に対してや、人々の自然観や信念のような文化的環境や、また地域の政治的な環境に対してもっともよく適応したものになりうる。このような、地域の人々が資源に最も近いということによる利点を重視した指摘は Davidson-Hunt & Berkes(2003)からもなされており、中央集権化された管理組織と比較して、管理を累積的に実践し情報を蓄積している点で CBNRM は優れていると考察する。また Ostrom & Schlanger(1996)は CBNRM のもう一つの利点として、監視と実践に係るコストが共有管理では経済的に最適化されていることを強調する。

しかし人類学の流れを汲むコモンズ論の研究者からは、設計原理に示されるような権利の明確化を適用することが、権利関係が不明瞭なまま慣習的に行われている共有資源管理との間で葛藤を発生していることが指摘されている。Ensminger(1996)は、アフリカの開発援助を事例に、地域の人々の社会・文化的背景である、土地の利用と相続に関する親族内関係のダイナミクスと土地利用のリスク管理的側面や、法的な権利関係に関する知識と教育格差などの観点から、それが CBNRM アプローチであっても、利用権を明確化することによって問題が生じる点を検討している。

コモンズ論の研究者にははっきりと2つの流派が見て取れる(Johnson, 2004)。一つは経済学や政治学を背景とし、制度の機能と合理的な意思決定を検討対象とする権利(Rights)派の流れであり、設計原理を提唱し、それを応用した CBNRM の実施過程から課題を受け取ることにより研究を進展させてきた Ostrom(1990)や Baland & Platteau(1996)らはその代表的な研究者と言える。もう一つは人類学を背景として、資源管理の歴史など社会・文化的要素を中心に据えた資格(Entitlement)派である。この立場からは、Ostromらの研究は個人の合理的な意思決定と選択に基づき、特定の権利関係において協力的な行動がどのように予測できるかという演繹モデルにとどまり、資源と人間の関係に含まれているはずの権力関係や格差の問題が覆い隠されてしまっているとの批判がなされている。

合理的な判断が可能である人間像を基本に据えた制度の効果性の追求と、それに対して、資源そのものの性質や資源に関わる社会・文化的状況を制度の中に組み込むことができているかという問いは、経済学や政治学を背景とするコモンズ論の研究者たちの間でもしばしば議論の対象となってきた。共有資源に関する制度研究の進展と比較すると、資源に関わる生物物理学的、社会的、経済的、文化的状況における差異による影響については十分な研究が行われておらず、未発達分野となっていることが指摘されている(Agrawal, 2002)。このようにコモンズ論の知見を CBNRM として資源管理政策へ応用するにあたっては、その土地固有の社会・文化的な観点からの検討をどのように制度に組み込むかが課題と

して立ち上がってきた。

2. モンゴルの牧畜社会と CBNRM

以上のコモンズ論を踏まえ、本章ではまずモンゴルの牧畜の特徴を一般交換の観点から検討する。次に、モンゴルにおける土地管理の変遷を整理し、最後にモンゴルの牧畜社会へ CBNRM を導入する際の課題を明確化する。

(1) 牧畜社会と一般交換

人は一般に互酬性の規範を持ち、様々な社会の仕組みが一般交換によって成立していることは人類学、社会学、心理学など幅広い分野で支持されている(煎本, 2007; 高橋, 2007)。一般交換とは特定の二者間における交換(限定交換)に止まらない、多人数の間で行われる交換を指す。例えば A から何かの資源を受け取った B は、A ではなくて、別の C という人物が困っているときに、その C に対して資源を提供するといったように、一対一ではない利他的な行動を選択することも可能であり、最終的には、もしも A が資源の提供を欲した場合、A に対して誰かから資源が与えられれば一般交換は成立する。二者間の限定交換しか存在しない状況と比較した場合、こうした一般交換に支えられた利他的な行動の見られる社会システムは効率性が高く、優れた秩序を形成することが可能になる。なお、ここで言う一般交換と互酬性の規範が成立している状態は、大まかには同じようなニュアンスとして捉えておくことにする。いずれも、個々人の持つ“意味”や“信念”の共有性によって社会の自己維持システムを構成するという視点から個人と社会のダイナミックスを理解することの重要性を示唆している(山岸, 2007)。

モンゴルの伝統的な牧畜資源の利用形態の基盤には互酬性の規範がある(Fernandez-Gimenez, 2002)。この互酬性が資源利用者の移動と柔軟な利用を可能にしておき、互酬性原理が働く対象は、何らかの権利や労働、物品のほか、社会的な、政治家への紹介や市場へのアクセスなど、たいへん幅広い。これらの返報的な交換への期待が、別のエリアから移動してきた「ヨソ者」が柔軟に資源を利用することを容認することに結びつき、また自分自身が機会主義的な移動を選択することを

可能にしてきた。Fernandez-Gimenez(2002)はまた、牧畜民による資源や集団の範囲の理解では、その境界は曖昧であることが特徴であると指摘する。このことは、牧畜民が自身の所属性について単純なウチソト意識とは異なる理解を形成することを可能にしている。ただし、これは彼らにカテゴリー意識がないことを意味するわけではない。自分を中心にした同心円状に家族や地域コミュニティ、そしてバグ(‘bag’, 村)、ソム(‘sum’, 郡)、アイマグ(‘aimag’, 県)、と連続的に変化する社会的カテゴリーが存在している。ただし、その形成され方はグラデーション状の認識で、西欧で理解されるように重層的にカテゴリーが重なり合っていたり、大きさの異なるカテゴリーが入れ子構造になっているものとはニュアンスが異なる。

またそのような社会的カテゴリー意識があったとしても、モンゴルの伝統的な牧畜民は、どんなに「ヨソ者」であっても自然資源利用にあっては排他的になることはなかった。例えば、このような一般交換に基づいた牧畜社会の慣習的制度の代表的なものにオトル(‘otor’)がある。オトルとは、越冬前の家畜の健康強化や、ゾド(‘zud’, 冷害)からの避難目的で行われる、家畜を伴った長距離移動のことである。オトルの際には、牧畜民は規則的な季節移動の範囲から離れ、ソムやアイマグなどの境界を越えて、小型テントなどで宿泊しながら家畜と共に移動することになる。

オトルが成立するためには、自然資源利用に関して見ず知らずの「ヨソ者」にも排他的でないことが最低限の要件であり、さらには、食や宿の提供に関する互酬性の規範が成立していればいっそう効果的であることは容易に理解できよう。このように、伝統的な牧畜民の慣習として「ヨソ者」にも互酬性の規範が成立していた点を踏まえて、近年の土地管理の変遷について理解する必要がある。

(2) 土地管理の変遷について

市場経済化から CBNRM まで ここでは、土地管理の変遷について、とくに土地所有と家畜所有の変化による牧畜形態の変遷について、市場経済化から CBNRM の導入までを滝口(2013)に基づいて整理をする。

1990 年代初頭、モンゴルでは計画経済から市

場経済への移行が図られ、土地の私有化が議論されるようになった。国際通貨基金、アジア開発銀行、世界銀行などの国際的な開発機関が、牧草地を含む幅広い土地の私有化をモンゴル政府に推奨した。しかしながら牧草地に関しては憲法上で私有化が認められていないことから、土地私有化の法整備は難航した。1994年、季節毎のキャンプ地⁴に対して牧畜民が有する権利を定めた土地法(the Land Law)が制定された。土地法では、夏・秋営地⁴と春・冬営地で土地権利が異なることや、牧草地への所有権が認められないこと、そして権利主体が個人ではなく家族ないし伝統的な遊牧集団であることなど、遊牧の慣習が法律に反映されている点に特徴がある(富田, 2008)。2003年に土地私有化法(new Land Privatization Law)が都市部と集住部に限り市民の土地所有権を認める法律として制定されたが、牧草地の所有権は認められていない(滝口, 2013)。現在では、牧草地法(the Pastureland Law)の制定に向け、議論が続いている(Kamimura, 2013)。

以上の土地関連法の整備は、牧草地の利用に関する慣習的な制度を近代的な法権利によって成文化する試みととらえることができる。その成文化は国際機関が期待する私有化の観点からはあいまいさを残すものであり、遊牧の慣習がなお残されたものであった。しかしその一方で、従来慣習的に用いられてきた春・冬営地の権利関係が成文化されることにより、冬営地の権利保有者の移動頻度が減るという調査結果も報告されている(Fernandez-Gimenez & Batbuyan, 2004)。土地権利関係の制度化に加えて、牧草地利用の変化の要因となっているのが、牧畜民の家畜所有の変化である。1992年、市場経済化が始まると家畜は私有化され、牧畜民は市場アクセスの良好な首都のウランバートル周辺や同市を含むトゥブ・アイマグ周辺へと移住する傾向を示した。

さらに牧畜に係る参入コストは他の生業機会への参入と比較すると小さくて済むことも相まって、私有化と同時に未熟練の新規牧畜参入者が大量に増加した。このとき、Ykhanbai(2011)によれば、モンゴルの牧畜民の70%が所有家畜数100頭以下という貧困牧畜民となった。こうして増加した新規牧畜参入者による家畜数増も一因とな

って、水資源、キャンプ地、牧草地に対する統制困難な集中が見られている。

私有化による資源管理の限界に対して、モンゴルでも2000年前後からCBNRMアプローチが注目されるようになった。この新たなアプローチは、土地私有化によってではなく、遊牧の伝統的な社会関係や牧民組織、行政などの地域社会における利害関係者間の調整を通じて資源管理を行うことをめざしている(Ykhanbai, 2011)。自発的な牧畜民たちの活動や国際機関による多くのコミュニティ開発プロジェクトを受けて、2012年にモンゴル政府は市民参加の支援と地方行政の権限強化を定める地方予算法の改正を行った。こうして、いまやCBNRMアプローチはモンゴルの開発における既定路線とってよいだろう。

しかしながら、モンゴルにおけるCBNRMアプローチには、なお問題が残されている。それはCBNRMをモンゴル固有の状況に応じて援用するという問題である。モンゴル固有の状況とは、国土が広大で人口密度が極めて低いこと、先進国という意味での市民社会がまだ機能できていないこと、土地の「所有」という概念が十分に理解されていないこと、そして発展途上の段階にある資源管理制度など多岐にわたるが(Ykhanbai, 2011)、ここで注目したいのはモンゴルの牧畜の資源利用の特性とCBNRMアプローチの関係である。

CBNRMの課題 Ostrom(1990)は、権利を明確にすることによって各利用者は資源から得られる利益を考慮する結果、その資源の適正な管理に強い関心を持ち、持続可能性に配慮した資源利用や管理を行うことになるであろうと予測し、これを所有権レジームが適正な管理を導きやすい第一の理由とした。そして共有による管理制度の設計原理において、権利を付与される利用者の範囲を明確にすること、すなわち境界線を引くことを適性管理の第一原則に挙げている。このように資源管理を合理的な制度デザインという面から考察する立場に立つと、CBNRMにおいては権利の明確化、すなわち権利を認められた資源の範囲と権利を認められた利用者の範囲が明らかにされることが求められる。

資源の管理制度がどの程度機能できているかは、制度の経済的効率性、持続可能性、公正性の3基準から評価される(Dietz et al, 2002)。ここでの

⁴ 営地とは牧草地として利用する土地のことである。

公正性とは、資源存続のための個人の負担と資源から得られる利益の対応関係に関する基準である。土地と利用者に対する明確な境界線は、このような CBNRM における公正性の保証をすることが期待される。

一方、モンゴルの移動牧畜は資源の柔軟な利用形態を採用しており、資源の範囲と利用権を持つ集団成員の範囲の両方の境界はあいまいで透過性が保たれ、さらに重複することも認められている(Fernandez-Gimenez, 2002)。もちろん移動牧畜においても、特定の共有資源の利用権を所有することは大事なのだが、もう一方では、環境や気候の変動や政治・経済的状況の変化に適応した不確実性低減のための柔軟な資源利用を可能にする権利も重要である。Kamimura(2013)は、移動牧畜が単に季節ごとの習慣的な遊牧の様式を継承しているのではなく、ゾドなどに対する有効な対策であり、社会経済状況の変化への適応策でもあるとし、これを牧畜生活における不確実性低減のための方略と位置づけている。

しかしこうした柔軟な利用の形態は Ostrom の設計原理の第 1 の原則を反映している CBNRM の実行と矛盾してしまう。この点が CBNRM をモンゴルの牧畜社会へ導入する際の課題である。

3. 社会的アイデンティティ理論からの考察

本章では、CBNRM の課題を集団研究の観点から検討する。具体的には CBNRM に伴う明確な境界性の弊害について社会的アイデンティティ理論を援用し考察を行い、その考察を具体的なフィールド事例を基に再検討する。

(1) 社会的アイデンティティと互酬性規範

境界線と集団間葛藤 社会心理学分野で発展してきた集団研究の知見からは、集団の成員性(membership)が集団間の葛藤に結びつきやすいことが示唆される。Tajfel(1959)はどのような形であれ集団の境界が強調されると、人びとは所属している集団の成員として自己を社会的にカテゴリー化し(self-categorization)、そこで自動的に集団間の比較を行っていることを明らかにした。すなわち、自分がある集団の一員であると認め、それを意識することは、自分が所属する内集団とそれ以外の集団である外集団の違いを際立たせ、その

比較を行うことに結びつくのである。さらにこうした自己のカテゴリー化に基づく集団間の比較は社会的比較を生じる(Festinger, 1954)。社会的比較過程において人びとは、好ましい自己イメージを維持・高揚するように動機づけられているため、内集団の優位性を保持し促進するような比較を行う。具体的には、内集団を好ましいものとして認知する一方で外集団のネガティブな側面に注目をするなど、「仲間」と「ヨソ者」に異なる傾向の認知過程が働くことで、内集団の優位性と外集団の劣位性を確認する。また、自己カテゴリー化の影響は認知のみならず個人の行動にも及び、外集団に対して不寛容であったり、不利な報酬分配を行ったりなどの差異を生じさせる(Tajfel & Turner, 1979)。その結果、集団間の葛藤が生じ、集団間紛争などに発展していく。

社会的アイデンティティ理論として提唱されるこのような一連のプロセスが示す現象が実際に観察されている具体例としては、西ドイツの学歴の低いドイツ人とイタリアやトルコの外国人労働者との葛藤(Schönbach, Gollowitz, Stiepel, & Wagner, 1981; Wagner & Schönbach, 1984)や、南アフリカの人種隔離政策(Hogg & Abrams, 1988 吉森・野村訳 1995)が有名である。しかし社会的アイデンティティ理論の知見が持つより大きなインパクトは、集団間の葛藤は、最小集団実験パラダイムと呼ばれる、敵対心が全く存在しない状況でも見いだされるという点にある。最小集団実験パラダイムでは、提示された黒点の数をいくつと数えたかや抽象画の選択といった、利害と無関係な操作によって集団の境界を設けており、さらに集団の成員がどこの誰であるのか全く手がかりがない状況が用いられている。すなわち、現実の利害対立やあるいは過去の行動歴や歴史的な背景が無くても、また境界が新たな利害対立とは無関係のものであっても、単なる線引きによって「内集団ひいき」は発生し、集団間の葛藤がもたらされるのである。

以上、集団の境界を引くことは単なる境界設定に止まらずに、集団間葛藤にまで発展する可能性があるということが社会的アイデンティティ理論によって示される。

集団成員性と互酬性規範 さらに、集団の境界は互酬性の期待を狭めることに繋がり、結果的に一般交換に基づく利他的行動により成り立つ社

会システム全体を崩壊させる危険性を指摘できる。

人は無条件に誰とでも協力的な交換関係を形成できるわけではない。神・山岸(1997)は、囚人のジレンマゲームを用いた実験から、他者への協力行動が見られるのは、互酬性が期待できる内集団成員が相手の場合であることを確認している。人びとは、継続的な相互作用場面を繰り返し経験してきたことから形成されたと考えられる直感的なヒューリスティクスに基づき、お互いに協力しあえるだろうという互酬性の期待を持つ。だが、これは内集団成員間でのみ生じ、外集団に対しては相互協力の期待を形成しにくいのである(神・山岸, 1997)。

モンゴルの牧畜社会における資源管理のために CBNRM が利用権を明確化し、集団や土地の境界を設定することは、互酬性を期待できる内集団の範囲を極めて狭い範囲へ特定することに結びついていると考えられる。そして互酬性の規範が育ちにくい状況では、その累積が一般交換によって社会が成り立つという仕組み全体を崩壊させることの一因になると解釈できる。

一方、前章(1)で述べたように慣習的な牧畜社会では、「ヨソ者」であっても互酬性が期待できる一般交換の可能な相手であると認識し、内集団にとどまらない広範な協力行動が行われていた。このことは、協力行動は継続的な相互作用が行われる範囲内で発生するとする神・山岸(1997)や社会的アイデンティティ理論から導かれる予測に反する知見である。集団成員性と互酬性の関係について、フィールドからの知見に基づいて理論の再検討を行う必要性が示唆される。

(2) 事例に基づく検討

CBNRM の中で生業に取り組む牧畜民の聞き取り事例を通して、以上の点について考察する。

米政府の援助機関ミレニアム・チャレンジ公社(Millennium Challenge Corporation, 以下 MCC)による所有権プロジェクト(property rights project)では、ウランバートル近郊の牧畜地域において、複数世帯から構成される牧畜民の集団(pastureland user group, 以下 PUG)に所定の土地を管理させて、土地の占有権をその集団に付与している。同時に MCC は PUG に、牧畜の生産効率と持続可能性を

改善するために必要な井戸や畜舎などのインフラや、牧畜知識以外にも農業に関する知識やビジネス、マーケティングに関するトレーニングなどを提供している(Millennium Challenge Corporation, 2010)。MCC の所有権プロジェクトは資源の範囲と権利関係、また利用者を明確にした CBNRM に基づく支援プロジェクトである。

筆者らが 2012 年 9 月に聞き取りを行った T 氏はトゥブ・アイマグにて MCC のプロジェクトに参加をする 51 歳の牧畜民である。2000 年に軍隊を退役して牧畜を始め、2010 年に MCC のプロジェクトに参加をし、5 世帯から構成される PUG に所属して妻と孫と 3 人で暮らしている。PUG での土地占有の契約期間は 15 年間であり、占有権を持つ境界線内の移動を年に 3 回行う。PUG の成員間では、冬の飼料を備蓄するための草刈りをはじめ、家畜生産品を共同で業者に売るなど、協力して牧畜の効率性を高める試みを行っている(Figure 1)。



Figure 1 所有権プロジェクトによる占有の境界を草原の中に看板で掲示

(2012 年 8 月 アルタンブラグ・ソムにて撮影)

T 氏がプロジェクトに参加した理由は、そのときはとにかく「土地をもらう」ことが大切だったという。その後は生活レベルも上がり、「良い」生活と自己評価している。「ここには必要なものは全てある」のだそうだ。契約期限を延長申請したいと考えてもいる。

問題は、プロジェクトに参加していない他の地域の牧畜民が放牧をしながら PUG の占有地へ侵入してくることだと言う。侵入はときには表立った係争に発展することもあり、最も深刻な悩みである。とくに秋には馬の群の侵入が多く、自動車

で追うなどして占有地から追い出している。その後、その馬の所有者が、放牧していた馬が一頭いなくなった等の言いがかりを付けに来ることもあった。侵入者にはMCCとの契約書を見せて占有権があることを説明するが、あまり理解してもらえない。喧嘩になってしまい、相手に暴行をしたと警察へ届け出されたこともある。警察には、このような占有地への侵入行為こそ取り締まってほしいと言う。さらにT氏は占有地への侵入を違法とする法令を作るなど、きちんと法整備をして欲しいとの要望を持っていた⁵。

T氏が挙げるこのような「問題」には、社会的アイデンティティ理論による予測との一致が見られる。

Hardin 説もその後のコモンズ論の研究者たちも、権利関係が不明確な資源の管理は利用者の集合的無責任を生じさせるとの予測に基づいて、適正管理を導くためには権利の明確化が肝要との共通の認識を有していた。さらに、権利を付与される利用者の範囲を明確にすること、すなわち境界線を引くことが、共有による管理制度の設計原理の第一原則として挙げられた。この原則を応用した CBNRM においても当然、権利を認められた資源の範囲と権利を認められた利用者の範囲が明確化されたのであった。

しかしこのような PUG の成員であるか否かという境界は、単なる権利の明確化にとどまらなかった。T氏の事例からは、同じ PUG 内の他の成員に対する協力行動が見られる一方で、「ヨソ者」に対する不寛容な態度と行動が見受けられる。ここに、境界が「ヨソ者」に対する不寛容さへと結びついていることの一端が示されている。この点が社会的アイデンティティ理論による、境界の設定が自己を社会的にカテゴリー化させ、その結果外集団に対する不寛容な行動に結びつくとの予測と一致する点である。単なる境界線を引くことによってでも、人びとは自らが所属する集団の成員であると意識し、境界の内外に対してそれぞれ異なる評価や行動を示す。それは T氏が PUG の

成員間における協力行動を行う一方で、PUG 外の牧畜民に不寛容になり、その排除に躍起になるように如実に表れている。もちろん、MCC は単なる線引きだけでなく、PUG の成員に特別な意識を持たせ、とくに占有に対して執着することを促していると考えられる。しかし、このことは、カテゴリー意識をより強調させる効果をもたらすと考えることができ、社会的アイデンティティ理論による説明の妥当性をむしろ補強する。

このような所有権プロジェクトの事例とは対照的に、プロジェクトに参加をしていない、慣習的な牧畜の特徴を比較的多く残す牧畜民を対象とした聞き取りと観察からは、T氏とはきわめて異なる、「ヨソ者」への寛容な様子が分かる。慣習的な牧畜では見ず知らずの初対面の者に対しても食事や、ときには小型テントを提供することは日常茶飯事であることが伺えた。また家畜を伴って移動してきた「ヨソ者」が牧草地に入ることを排除せず、家畜に牧草を食べさせることにしても豁如たる様子が見受けられた。

また T氏の事例からは、明快な境界が与えられたことにより、継続的な相互作用を行う内集団成員間でのみ互酬性の期待が働き、一般交換が可能な範囲が極めて限定的なものとなっていることが伺える。成員性の明確な PUG が設定されたことによって、互酬性の期待が働く範囲が明確化され、そのことから、PUG の外における一般交換が機能しなくなっていた。ここからはさらに、相互作用の減少した PUG の外に対してはますます互酬性の期待が低下していき、一般交換に支えられる社会の機能が崩壊していくことが予想される。

慣習的な牧畜においては、互酬性原理が働く対象のひとつに「情報」がある。とくに馬の遊牧を行う牧畜民は長距離を移動することがあり、地域の政治経済や気象に関するニュースなど、情報の伝達という観点から重宝されることが多かったという。T氏の発言からは、「ヨソ者」がどこから来てどこへ行ったかについては関心が示されなかった。一方、慣習的な牧畜民たちは、当該の「ヨソ者」がどこから来たのかなどの情報は、その近隣で牧畜を展開している知り合い同士の間にかかなりの速さで情報が伝達されている様子も見られた。こうした情報交換は、単なるニュースの伝達だけでなく、互酬性の規範を再生産する機

⁵ 占有権は排他的な権利であるため、侵入や無断での利用などは本来は違法である。しかし牧畜民にとって、占有(モンゴル語で‘ezemshih’)という言葉は排他性を含まないものと理解されることが多い。Sneath(2002)によれば、こうした理解はモンゴルの伝統的牧畜が封建諸侯との関係のなかで発展してきたことと深く関わっていると考えられる。

能があると考えられる。このことは、PUG が外集団の侵入を許さないことによって、一般交換に支えられる社会の機能の一部を失っている一つの例と言えるであろう。

4. まとめ

コモンズ論の資源管理政策への応用である CBNRM には、制度に対する社会—文化的な観点からの検討が課題とされてきた。モンゴルの牧畜社会に適用された CBNRM について、その効果と課題について精査を行ってきた研究者たちは、明確な境界の設定をフィールドに持ち込むことで生じる問題を指摘してきたが、コモンズ論の不備を補うだけの理論的支柱を有してこなかった。本稿ではさらに、社会心理学の知見を用いて、その問題点を明確化した。

社会的アイデンティティ理論からは、集団の境界設定は単なる線引きに止まらず、集団間葛藤にまで発展する可能性があることが示唆された。CBNRM の中で PUG の成員となった牧畜民からの聞き取り調査からは、慣習的牧畜では見られなかった外集団に対する顕著な不寛容さが示され、社会的アイデンティティ理論による予測との一致が伺えた。さらに、モンゴルの牧畜社会の機能の多くが互酬性に基づく一般交換によって支えられていることに注目し、境界の設定がこれを阻害している可能性について考察した。事例の検討より、境界が明確化されることによって互酬性の期待の範囲が同じ PUG の成員に限定され、外集団に対する一般交換が機能しなくなっていることが傍証された。

社会心理学で発展してきた社会的アイデンティティ理論は、現場で指摘されてきたコモンズ論の問題点を修正する上で頼れる理論的支柱となる可能性を秘めている。同時に、本研究で確認された慣習的牧畜の一般交換の在り方は、一般交換による互酬性が期待できる範囲が内集団であるという従来の理論に見直しを迫る。今後は、フィールド研究による“仮説の発見”が実験室で再現できるか、できないとしたらどのようなパラダイム上の問題があるかについて明らかにしていく必要があるだろう。

学術上の関心のみならず、本研究は制度設計においての示唆もある。CBNRM の主な考え方の一

つである所有権の明確化は、権利関係が曖昧なままであることが集合的無責任を生じさせ、結果として共有地の悲劇に繋がりがねないという問題提起に基づいていた。本稿では、所有権が曖昧でも互酬性の規範が強く存在する場合にはそのことを優先する方が結果的に資源管理がうまくいくことを示した。もしそうであるならば、制度設計に際しては、当該の社会でどの範囲までどのような互酬性の規範が成立しているかを見定めてから境界線を引くべきか否かを検討するという手順の必要性を提言できる。その際、単純化しすぎた内集団・外集団ではなく、連続的に変化する社会的カテゴリーを読み解くことこそ、社会心理学から制度設計への貢献となるだろう。

引用文献

- Agrawal, A. (2002). Common resources and institutional sustainability. In Committee on the Human Dimension of Global Change (Ed.), *The drama of the commons*. Washington, D.C.: National Academy Press, pp. 41-83. (茂木愛一郎・三俣 学・泉 留維(監訳) 2012 コモンズのドラマ: 持続可能な資源管理論の十五年 知泉書館)
- Baland, J. & Platteau, J. (1996). *Halting degradation of natural resources: Is there a role and rural communities?* Oxford, UK: Clarendon Press.
- Davidson-Hunt, I. J. & Berkes, F. (2003). Nature and society through the lens of resilience: Toward a human-in-ecosystem perspective. In F. Berkes, J. Colding, C. Folke (Eds.), *Navigating social-ecological systems: Building resilience for complexity and change*. Cambridge, UK: Cambridge University Press, pp. 53-82.
- Dietz, T., Dolšák, N., Ostrom, E., & Stern, P. C. (2002). The drama of the commons. In Committee on the Human Dimension of Global Change (Ed.), *The drama of the commons*. Washington, D.C.: National Academy Press, pp. 3-35. (茂木愛一郎・三俣 学・泉 留維 (監訳) 2012 コモンズのドラマ: 持続可能な資源管理論の十五年 知泉書館)
- Ensminger, J. (1996). Culture and property rights. In S. S. Hanna, C. Folke, and K. Mäler (Eds.), *Rights to nature: Ecological, economics, cultural, and political principles of institutions for the environment*. Washington, D.C.: Island Press, pp. 179-203.
- Fernandez-Gimenez, M. E. (2002). Spatial and social boundaries and the paradox of pastoral land tenure: A case study from postsocialist Mongolia. *Human Ecology*, **30**, 49-78.

- Fernandez-Gimenez, M. E. & Batbuyan, B. (2004). Law and disorder: Local implementation of Mongolia's Land Law. *Development and change*, **35**, 141-166.
- Festinger, L. (1954). A theory of social comparison processes. *Human Relations*, **7**, 117-140.
- Hardin, G. (1968). The tragedy of the commons. The population problem has no technical solution; it requires a fundamental extension in morality. *Science*, **162**, 1243-1248.
- Hogg, M. & Abrams, D. (1988). *Social identifications: A social psychology of intergroup relations and group process*. London, UK: Routledge. (吉森 護・野村 泰代 (訳) 1995 社会的アイデンティティ理論: 新しい社会心理学体系化のための一般理論 北大路書房)
- 煎本 孝 (2007). 人類学的アプローチによる心の社会性 煎本孝・高橋伸幸・山岸俊男 (編著) 集団生活の論理と実践: 互惠性を巡る心理学及び人類学的検討 北海道大学出版会 pp. 3-33.
- 神 信人・山岸俊男 (1997). 社会的ジレンマにおける集団協力ヒューリスティクスの効果 社会心理学研究, **12**, 190-198.
- Johnson, C. (2004). Uncommon ground: The 'poverty of history' in common property discourse. *Development and change*, **35**, 407-433.
- Kamimura, A. (2013). Pastoral mobility and pastureland possession in Mongolia. In N. Yamamura, N. Fujita, & A. Maekawa (Eds.), *The Mongolian ecosystem network: Environmental issues under climate and social changes*. Springer Japan, pp. 187-203.
- Millennium Challenge Corporation (2010). Amendment to Millennium Challenge Compact between the United States of America acting through the Millennium Challenge Corporation and the government of Mongolia. Millennium Challenge Corporation 2010 年
<<http://www.mcc.gov/documents/agreements/compact-amendment-01-mongolia.pdf>> (2014 年 3 月 20 日)
- 三俣 学 (2008). コモンズ論再訪: コモンズの源流とその流域への旅 井上 真 (編著) コモンズ論の挑戦: 新たな資源管理を求めて 新曜社.
- 大沼 進 (2014). 社会的ジレンマと環境問題 佐竹暁子・巖佐 庸 (編著) 生態学と社会科学の接点 現代生態学講座 4 巻 共立出版 pp. 63-79.
- Ostrom, E. (1990). *Governing the commons*. New York, NY: Cambridge University Press.
- Ostrom, E. & Schlanger, E. (1996). The formation of property rights. In S. S. Hanna, C. Folke, & K. Mäler (Eds.), *Rights to nature: Ecological, economics, cultural, and political principles of institutions for the environment*. Washington, D.C.: Island Press, pp. 127-156.
- Schönbach, P., Gollowitzer, P., Stiepel, G., & Wagner, U. (1981). *Education and intergroup attitudes*. New York, NY: Academic Press.
- Sneath, D. (2002). Mongolia in the 'age of market: Pastoral Land-use and the development discourse. In R. Mandel & C. Humphrey (Eds.), *Markets and moralities: Ethnographies of postsocialism*. Oxford, UK: Berg, pp. 191-210.
- Tajfel, H. (1959). Quantitative judgment in social perception. *British Journal of Psychology*, **50**, 16-29.
- Tajfel, H. & Turner, J. C. (1979). An integrative theory of intergroup conflict. In W. G. Austin & S. Worchel (Eds.), *The social psychology of intergroup relations*. Monterey, CA: Brooks-Cole, pp. 33-47.
- 高橋伸幸 (2007). 人間社会の特徴としての社会的交換 煎本孝・高橋伸幸・山岸俊男 (編著) 集団生活の論理と実践: 互惠性を巡る心理学及び人類学的検討 北海道大学出版会 pp. 34-54.
- 滝口 良 (2013). モンゴル・ウランバートル市ゲル地区における土地私有化政策と住民参加型開発を通じた市民の形成に関する人類学的研究 北海道大学大学院学位提出論文(未公刊).
- 富田敬大 (2008). ポスト社会主義モンゴル国における遊牧民と土地私有化政策: 地方社会の土地利用に関する方法論的考察 立命館大学大学院総合先端学術研究科紀要 *Core ethics*, **4**, 213-225.
- Wagner, U. & Schönbach, P. (1984). Links between educational status and prejudice: Ethnic attitudes in West Germany. In N. Miller & M. B. Brewer (Eds.), *Group on contact: The psychology of desegregation*. Orland, FL: Academic Press, pp. 29-52.
- 山岸俊男 (2007). 「心の社会性」解明に向けて 煎本孝・高橋伸幸・山岸俊男 (編著) 集団生活の論理と実践: 互惠性を巡る心理学及び人類学的検討 北海道大学出版会 pp. 187-195.
- Ykhanbai, H. (2011). *Community based co-management of natural resources in Mongolia: Ten years of experience*. Ulaanbaatar, Mongolia: Admon.